

以謁  
塚  
雜  
鈔

×

a 2

謁  
敷  
雜  
鈔

490.4

Ai-2



No. 1179

富士川文庫

550

大鳥

日本  
東京



雜抄

○ 雜漢寺



市志五百雜漢寺の開基は浅草道に任める佛作仁  
 者なりといふ者あり雜漢寺の思立よりして雜漢佛の刻  
 而立か不そ及浅草寺觀音寺丸にほくおひ多分  
 刻之を魂を多くつて我下地の布ありといふことつみ  
 うさゆて是等不佛一神を村金をもあて分先の積  
 りにて魂を多くとし是等 余程也其れは付か仁  
 者なり法神して名を移せしと改め其れを蘇派鉄牛  
 和尙忠孝子と改りて是等も其れ蘇派に有り也

第壹院様濟代只今の如く連三塊、宇がり交  
那通多言坪りこれに致地計御、小庭を建ま  
りて、その方をとて、今、小庭像を刻、音とく、とて、巻  
く、即、小庭を代、とて、

有、酒院様濟代、とて、中、小庭像、御、とて、  
り、成、為、吉、つ、も、此、方、又、ま、さ、り、小、庭、而、も、成、由、一、交、  
清、取、方、も、小、庭、為、任、一、世、の、大、切、様、及、地、り、も、傍  
多、如、故、境、の、様、お、様、く、有、り、喜、子、の、方、七、以、内

お、山、交、修、く、き、道、通、を、お、取、付、く、と、て、一、年、百、地、と、て、  
只、今、冬、境、也、と、成、り、れ、て、公、儀、と、り、公、儀、様、と、成、り、  
初、口、の、口、洗、方、も、何、も、小、庭、像、交、の、井、を、た、と、り、把

と、以、て、裁、り、存、を、取、り、も、れ、を、所、存、第、一、の、を、物、相、お  
傾、り、き、り、一、明、君、の、清、成、光、と、て、一、又、整、り、の、地、と、お、成  
て、第、五、百、俵、下、と、り、の、口、の、意、を、つ、つ、て、右、清、米、の、五、百、  
清、納、交、り、を、候、御、意、と、て、小、庭、と、成、り、俵、を、お、取、  
は、ま、り、と、り、と、り、御、口、の、意、を、つ、つ、て、一、又、整、り、の、地、と、お、成

右、右、右、右、利、米、を、差、お、り、の、口、の、意、を、つ、つ、て、一、又、整、り、の、地、と、お、成  
右、右、右、右、利、米、を、差、お、り、の、口、の、意、を、つ、つ、て、一、又、整、り、の、地、と、お、成

同前唯... 中根... 子四世... 〇前身... 中根...

禮達村百姓す四節

実父若少節

友翁 年ハ才

四世... 同前... 同前...

友翁祖父 実父

友翁母 志津 実父

男子ハ才

女子ハ才

友翁実父 友五節

友翁... の時... 志津...

多門傳字印あり而茂の多門傳字  
柳原中野村有性源翁

徳丸師 未九才

文化十之亥年十月十日再生お生ハ龍窪村ニ有る  
知名ハ久き儀トシ若クハ時トシ有翁トシハ才の時  
癒トシ死去の事お文ハ記シ如シ

徳五席ハ父 山谷氏

源翁 未四十九才

源翁妻お徳五席母

せハ 未三十九才

せハ又六席おの系生トシ村田翁去席トシハ  
おやハ才の才父去席知有る浪人ト有る文政  
四年四月廿七。七十七才死去

同人源翁お徳五席

源翁 未三十九才

同人お子源翁能見

乙五席 未三十九才

同人源翁お徳五席

源翁 未三十九才

先文政五年 十一月の月日源翁お徳五席の兄  
乙五席ハ田のふと生きたるお徳五席ハ兄ト見  
しハお徳五席ハお徳五席ハ何ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ  
お徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハお徳五席ハ

多うとくしをば神を神とあやしくおぼえりし  
をそ知ざらむしふあつておぼえりし  
屋と関人の御事云我を神なりたり元祖産  
村之御事いふ人の御事云我を神なりたり  
を語れば神なりといふ何や〜と云ふ事  
をいふ御事云といふ御事〜と云ふ事  
いひそそては怒〜と云ふ御事云といふ事  
きり我制〜と云ふ事云いふ事〜と云ふ事  
喧嘩云といふ事云〜と云ふ事云といふ事  
婦云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事

と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事  
と云ふ事云〜と云ふ事云〜と云ふ事云といふ事





る時を起してかへつよあつ山一葬子とてし時を  
白く度々今我の上を起してしぬる箱を定人落し  
入らぬ時を言の御書きある事と思ふていふことして  
今も終るころ切落すも未だ種をともたへる事  
なすきくしてとては未だいふ御金成たはぐくえ  
んとはらぬのこして何の差ある事あるれども  
りしとていふ事とては未だいふ御金成たはぐくえ  
二長くつら父母もいふことしては未だいふ御金成たはぐくえ  
に白髪もくはたすことしては未だいふ御金成たはぐくえ  
新編の御書きある事と思ふていふことして

遊ひし時を起してかへつよあつ山一葬子とてし時を  
白く度々今我の上を起してしぬる箱を定人落し  
入らぬ時を言の御書きある事と思ふていふことして  
今も終るころ切落すも未だ種をともたへる事  
なすきくしてとては未だいふ御金成たはぐくえ  
んとはらぬのこして何の差ある事あるれども  
りしとていふ事とては未だいふ御金成たはぐくえ  
二長くつら父母もいふことしては未だいふ御金成たはぐくえ  
に白髪もくはたすことしては未だいふ御金成たはぐくえ  
新編の御書きある事と思ふていふことして

ある時 母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
別て庭の柿の木の下の下りていさして三つ何とて窓  
の穴より家の内へ入て竈の側より又三つ居る程に母の  
何の病やんを申しあへ別れさむのいふ成り父と母  
しあひまゝとていさしていさしていさして母五席  
はまじし一年の正月或は星中としておぼえて云は  
るる又あつて二人あつてさ母をさ養ふに候しれ  
に三日の事にはさくさくあつしといひ合はたら  
るりつたわをいひ老母といひ候してあつしは三月  
に母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
はらうに即ち母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
だにけりあつてまゝ母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
後にもあつてまゝ母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
たりといひ母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
んまをいひ母の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
の病が癒へず入てはきつしとてしまふに  
あつてはけか何とていさしていさしていさして母五席  
えてはけか何とていさしていさしていさして母五席

主母祖母とていふやうに  
 物入りて曰く「婿さう集りしおと  
 久き情はしう人をもとゑの  
 人ういふまはとめさし  
 てゑいんさうまていしう  
 止うこつて得五郎のさう  
 七日は道徳村より何と  
 己ハ道徳村に生るる所  
 時の名をいふは多成る五  
 人ありていふは道徳村に  
 生るる所は五郎と改りし  
 久き情はしう人をもとゑ  
 の人ういふまはとめさし  
 てゑいんさうまていしう  
 止うこつて得五郎のさう  
 七日は道徳村より何と  
 己ハ道徳村に生るる所  
 時の名をいふは多成る五

人ありていふは道徳村に  
 生るる所は五郎と改りし  
 久き情はしう人をもとゑ  
 の人ういふまはとめさし  
 てゑいんさうまていしう  
 止うこつて得五郎のさう  
 七日は道徳村より何と  
 己ハ道徳村に生るる所  
 時の名をいふは多成る五

久き情はしう人をもとゑ  
 の人ういふまはとめさし  
 てゑいんさうまていしう  
 止うこつて得五郎のさう  
 七日は道徳村より何と  
 己ハ道徳村に生るる所  
 時の名をいふは多成る五  
 人ありていふは道徳村に  
 生るる所は五郎と改りし  
 久き情はしう人をもとゑ  
 の人ういふまはとめさし  
 てゑいんさうまていしう  
 止うこつて得五郎のさう  
 七日は道徳村より何と  
 己ハ道徳村に生るる所  
 時の名をいふは多成る五

得勝五郎... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...

徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...  
徳母... 徳母... 徳母... 徳母... 徳母...

於其末年より中ふ久き病の味癯々々々久き病の味  
似たりと云ふをいふに居たりと云ふは中野村の  
しるしに依りて宿寢村のやうなりと云ふは又久き病の差  
多き多かりと云ふは約しと云ふは延てみるるふ  
同廿七 彼年四月に去りて原病方へ近付ふと云  
りしか獨五節に宿寢のりぬといひては久き病  
の暮年をせんといひてはありと云ふは遂ぬといふ  
方ゆゑかかくて悟はすや命の許へ連りていくと彼  
家とて家の縁と流ひのりれと云ふはと云ふは

○五雲子先生傳

先生氏ハ王名ハ旺字ハ寧字ハ五雲子又紫竹林道  
人明人福建大原ノ人也父ハ大原ノ守也五雲子本祁  
ノ渡来ノ後王氏と諱テ大原を氏トす

法下ト云々仙ハ五雲子の齋名也

帝憲院様ニ侍時ニ 石上清侍御等とある或  
き五雲子氏名 侍尋時といふなりと云ふ  
瑩翁といふ書上より由雲仙

弱年親を任し時日本の志も二子ありと云ふは

を以て后妃の兄の才の是しとんなりし儒学其道  
の同門なりと云ふにけし人叛逆と意有りそるや露顯し  
終に刑罰せしめしとてそれ方朝廷御聞とて五雲子  
と同教する由風を多を母人孫と外危懼と意長  
あ人を塔に朝鮮國へ出奔せしめらる朝鮮を留中  
母人今給用豊饒ありしを門二人の口を人の家へ移  
死せり五雲子存念とれより日本へ返り見づやとて  
長安へ返り遠めの中残り一人の家へ移り死す本國母  
人よりの給用便宜と断絶して國窮なるを節長  
を以てて考案するに云ふ人長壽の事任三年と過  
きハかくされぬ所國法故子と諱ハ居任せり世間  
日本の言程と悉く能通せり以ての縁や五雲子の陸左  
へかり出ぬとて或は佐々木辰巳持下秋田とて醫者と業  
り居任を存せり人の府より活紙包も業を又懐  
中して市中を脈とて一脈とて一脈とて一脈とて  
年と経て治験多く世上にてもあつたり其時  
大猷院様より出陣場田加賀守辰十死の病氣を  
諸醫もよと来ぬたが先主指業を教り而快復  
まより大之名を振ひ諸大名方へ諸品は第一に富

豊とあり北紺屋所の室宅を接い末期は土翁  
五ヶ所其内餽贈ノ財物ヲ積置ク万治三年庚子  
四月廿六逝去葬三田大乗寺法諱ハ東嶺院時  
日輝居士ト号ス女子一人男子二人有リ長女ハ初門  
人雲也九嫁トシ雲東と生じ雲也死後愛宕下所  
小性祖内坂久五郎ノ嫁ト有子

内坂久五郎後ハ治長満ト改じけ人ハ  
権現様ハ比和年三ノ扱ト少人の子孫有

次子雲南後ニ雲考世人放蕩にシテ老守ノ遺財を

七矢志後ニ雲考世人放蕩にシテ老守ノ遺財を

真田伊豆守及ノ少ノ扱持をたけ治世

元禄八年乙亥十二月廿日卒死す

文政九年八月廿五日友人福山藩本藩養休より

借得本所上邸ノ直舎ニ書ヲ細齋善

○肥後と出—大男のり

文政十年の夏征後國を大男に付テ奉ル能くを  
城郡多給と云田中村の産之身の丈ハ七尺五寸或  
云七尺二寸身の重さハ三斗五升月半掌ハ腕骨より  
中指まで九寸五分歳二十七八大空武代山ハ徳本



羨の清廓内の邸を建江戸中法候方ハリと云ふ  
中より拓めて余ハ是一尺一寸五分細指三人守口  
五尺七寸

右府先年より人子猪れて大なる男故也身より成見

加藤紀雄を法正孝徳十六年六月十日午掌の長九寸

七分南河川妙園寺  
蔭板

丸山檀を丸樹寸

奥別の産の内相撲を云々三三律成理して終ふ七寸の小  
位を没し七寸より葬る圓山居士と自筆一にる

續々山檀を云々寸

智別四日布寸産寛政立憲年廿四寸八寸大ナク五人  
あすろけ時九紋新法吉し七寸寸嶽寸あすろけ七  
寸寸

釋迦嶽を云々寸形を云々妙里候一人生年二

十二年あお二年癸巳五月吉辰七年三葉深

川和初玄右の通親和の云々寸の形を云々寸存

赤部富々寸徳社院寸碑銘を云々寸大寸と云

す寸の寸や寸お寸獲寸大寸金寸ふ寸七寸人寸子寸六寸分寸と云々寸昔

お寸諸寸貞寸位寸九寸人寸字寸位寸七寸人寸子寸六寸分寸と云々寸日寸田寸野寸

田鬼方丈永季の天保山中志願の助幸成之七人云  
寸紀名無七人云云や中古鬼物の七人紀名鬼  
備家と物七人三寸足し續て紀名獄之物本獄  
ハ昭和九年秋を別産に戸の邸へ連年事あり  
時丈七人また後七人寸寸ありとあるあやむ  
未年四月の口世の事ありて死にたれ新成の誕生  
日之才生少能時をの碑を連後編事始て江戸入  
大なる坊の志丈と云碑終ハ坊谷天恩公孔平信能  
石樞島之助白山新三郎丈々六人四寸七分相撲大

谷風権助

寸錦新成はあり  
小形七寸三分

或後より先年原氏山位をらと人、日の下つ再山と云  
何方より許されしと云ふことありしに、  
高坊と谷風権助丈々六人寸ありと骨物  
大無くしれ、續て九人寸五分寸又南都  
の位知ぬも思ふに厚い位丈々方なり谷風の徳本の  
吉田若虎らも横徳を許さる少許に所も久為来  
度中より横徳を許さる谷風の續ては薩州の

水川定太ら後天津風仙臺の雲の天信たらし風  
師山龍たらし虹ヶ嶽松たらし中野川春三帝後文助  
丸龜の家ヶ鼻後平右七たらし又七右史也を抱二代目  
雷電為たらし市平車今あらしふ方の陣幕為たらし助  
南都の錦木塚たらし二代目子田川吉五帝あらし  
谷風六右の弟たらし四子と貴目たらし我宮と改七年  
乙卯三月九日四十六年一し死を仙臺の左邊に  
小葬るは之新姓谷御名了風  
二代目  
雷電為たらし

三編 壬午年 丁亥年 丁亥年 丁亥年 丁亥年  
丈六尺一寸五分 足高の形一寸七分の形七寸

○ 五保中 肥がまた生れ月あよりあ 一方男の角力年等  
道子丸を室あす名八生月終吉あらし辰年 白毛を  
身丈六尺七寸五分 手大 九寸 八寸 七寸 六寸 五寸  
五寸

○漢友庄三節由後也

以全致後 後友庄三節

大後友庄大江度元才武能方方江度祝中輔入道  
甚何後商員度忠必加納誠自能忠八百石也并友庄  
馬門利氏公孫 上意を以て氏に致

後友庄三節

又 少三節一才認  
庄三節一才認

少補之節 光以必必也并友庄三節 利氏氏祝父  
友庄三節 尉利代官度 實名 利字 未南 山 子  
親王系以字 由中 傳 父也并友庄三節 尉利氏

加納城より戦死す。後、長子守部俊宗、沈湍に在り。  
小姓先征し、由緒を「上波」寺に傳へ、  
俸山捕之節、先征す。祿二年に、五也、  
指尺様、心懸く、上意、  
陣中、  
小石、  
傳、  
由緒、  
此、  
此、

○長壽寺

天明三年癸卯八月七日、  
此、  
法、  
五、  
あり、  
有、  
恒、  
陰、  
○長壽

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書 欽定四庫全書

欽定四庫全書

○國禁西洋書籍

天文略 幾何原本 代疑論 日文算指

圖書較儀 勾股儀 十慰心 計開射物直原

強撒祭儀 春而醒 春度記 重記百言

二十四言 明量法儀 修遠日記 渾蓋通憲通記

況儀簡年儀記 滌平義記 天學初函 時人十篇

西學子記 辨世遠遠 三編字記 唐景教碑附

天主堂義 職方外記 天文論 七克

教要解畧 雲言靈龜句

絶徼同文記之中

聖徳書遠 聖水記言 天教駢述

右天学初函至同文記十三篇材家所藏

十誠鮮畧 材家所藏

天経或問後集 通計二十二部 定所雜添

○伊四子の首座 附法苑寺 銅佛

南芝心く長應寺の明人伊四子の墓何也  
墓石後長 臥棺と入を伊四子也  
女明と長應寺の墓也何也伊四子と云ふ

其文伊四子の墓也何也伊四子と云ふ

あり長應寺の日蓮派の寺として伊四子の墓也何也伊四子と云ふ  
其在白泉岳寺一通也と云ふ

曰亦知ら法苑寺として伊四子の墓也何也伊四子と云ふ  
其レ梁武帝廟を禱て禱たる銅像之け外として意見  
古師の織針の古物數多ありとして伊四子の墓也何也伊四子と云ふ  
其レ書即海上禪林の西に一僻地あり  
法苑寺として伊四子の墓也何也伊四子と云ふ

○織田秀家に竹何と云ふ同朋何の中中村の

生きたる者も病身なり中中村一河内守の者も成幸  
に中むの法をうけ入る秀吉の母と合宿する  
後男の子一人女の子一人秀吉と稱する子も持男  
ハ切久小井坊ハ羽柴多摩守秀利と名乗大和  
大納言とせむ子ハ家康の嫁やふれ三洲忌  
晴ハ西無入三年の好死去く号南無院曰

右の辰世間ハ不知しと秀吉と竹阿弥子と小名  
をと小井と云又日輪母の懐中ハ入と著る懐妊  
したる子ありて日吉丸と云院も二名在  
中中村代友稻熊助と云と其長長の子成  
る彼娘秀吉の母の斗鬪なり其娘予の母母  
なり者も海と云

豊臣大関傳ハ松下関翠軒自記を傳寫訖此傳ハ  
関翠軒自撰候様ニ申ス也 日下部景衡識

○牛王の事

或書ハ牛王ハ團也團の草也牛王の事法也  
うらまはしむる事牛王の二字ハ成る事  
按るハ牛王ハ牛王の事也



うらういしくぬき 雲ハ土ノ属ナシ名先ニ成リ  
玉ノ属ナシノ誤ナリ 東隣子

法社傳寺院ナリ出ル牛王トシクハハヤチノ風

俗生<sup>ふくま</sup>モノ神モト信仰<sup>しんぎやう</sup>ナリ少<sup>すく</sup>ク社系<sup>しゃけい</sup>ナリト云<sup>い</sup>ハズ

園<sup>いん</sup>ノ社ニ院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ナリト云<sup>い</sup>ハズ 沁丹<sup>しんたん</sup>をい<sup>い</sup>ハル<sup>ル</sup>院<sup>いん</sup>ノ家<sup>け</sup>ノ老

婆<sup>ば</sup>ノ巫女<sup>いづな</sup>ナリト云<sup>い</sup>ハズ 或<sup>ある</sup>ハ藤氏<sup>ふじ</sup>ヲ奉<sup>ほう</sup>ル子孫<sup>こそん</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ

牛<sup>うし</sup>ハ天<sup>てん</sup>ト南<sup>なん</sup>海<sup>かい</sup>ノ藤氏<sup>ふじ</sup>ヲ奉<sup>ほう</sup>ル家<sup>け</sup>ノ老<sup>らう</sup>ヲ云<sup>い</sup>ハズ

不<sup>ふ</sup>付<sup>つ</sup>汝<sup>に</sup>子孫<sup>こそん</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 鬼<sup>おに</sup>魔<sup>ま</sup>ヲ避<sup>よこ</sup>テサ<sup>さ</sup>シクハ

大<sup>おほ</sup>ノ家<sup>け</sup>ノ犬<sup>いぬ</sup>ノ字<sup>なづな</sup>ヲ云<sup>い</sup>ハズ

或<sup>ある</sup>ハ院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ノ撰<sup>せん</sup>撰<sup>せん</sup>有<sup>あ</sup>ル

院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 邪<sup>よこしま</sup>崇<sup>たう</sup>ヲ云<sup>い</sup>ハズ 又<sup>また</sup>藤氏<sup>ふじ</sup>

ノ子孫<sup>こそん</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 夜<sup>よ</sup>鬼<sup>おに</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 又<sup>また</sup>院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>

ノ生<sup>なま</sup>モ神<sup>かみ</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 神<sup>かみ</sup>ノ字<sup>なづな</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ

又<sup>また</sup>院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ノ生<sup>なま</sup>モ土<sup>つち</sup>寶<sup>たから</sup>印<sup>いん</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ

院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ノ邪<sup>よこしま</sup>崇<sup>たう</sup>ヲ退<sup>ひ</sup>クニ云<sup>い</sup>ハズ 院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>

ノ藤氏<sup>ふじ</sup>ノ神<sup>かみ</sup>ヲ云<sup>い</sup>ハズ 又<sup>また</sup>院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ノ物<sup>もの</sup>ヲ云<sup>い</sup>ハズ

院<sup>いん</sup>ノ子<sup>こ</sup>ノ生<sup>なま</sup>ノ下<sup>した</sup>ノ一<sup>ひと</sup>畫<sup>え</sup>ヲ下<sup>した</sup>ノ土<sup>つち</sup>ノ字<sup>なづな</sup>ノ下<sup>した</sup>ニ付<sup>つ</sup>

添<sup>そ</sup>テ筆<sup>ひつ</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ 牛<sup>うし</sup>王<sup>わう</sup>ト云<sup>い</sup>ハズ

誤しとて曰

院の子はとて平相公初稚の時母が病をなれぬに  
し時母の病入院の子はとて母は是法皇の御孫  
胤子とて母をなれぬとて曰

○流頭飲

朝鮮の南村月余り初母の病入甲申流頭飲  
とて母をなれぬとて母は是法皇の御孫  
胤子とて母をなれぬとて曰

○自反

北魏書高宗皇帝年六歲性敏惠初學反語於跡字下  
注云自反時侍者未達其意太子曰跡字足傍亦為跡  
豈非自反邪とて是亦反ハ即跡あり字書亦此語あり  
娘女良反魅去魚反神示申反趣取走反等皆自反  
と稱するなり 上曰

○中風

中風とて病名の名義を詳しやとて風ハ中風とてハ  
ハ寒疾のるる中風の症をなれぬとて近代  
の醫書に於て其説をなれぬとて醫家の説なき

小者〜うあ〜さうね〜さるゆ予思ふ小風と云  
 を風の凡と云う〜云はる小因て解〜  
 風と云ふ者〜云と〜  
 心身の疾或ハ氣血の疾一才の充満〜  
 引さる物皆風と云大塊の塊氣其名曰風と  
 風と云他のと云る〜  
 癩疾を大風と云腸風胃風〜  
 癩風此多癩風ハ白を〜  
 風氣氣血の錯乱あり〜  
 世は〜  
 中風の疾〜  
 水と〜  
 有水以畏之無風以教〜  
 小風の何〜

素不地より火風を四大と云此四大偈合して幻體を  
多し四大各其原より物より多時ハ之に煙氣帰火動  
轉物風と詳し為是煙氣歸火の世間の風一々に  
何してハ動轉よりと云らるるに氣のま  
ふれ又火の粒よりを風物と云御談正音ヨ  
神物夜ハ風物頭物と云を考ふよりハ火火  
傷と是より云ふも風と云字ハ一と云ハ  
一考ふよりハハ火火血の交はる中と云ふ  
ハ佛曲ハ梵言よりハ翻譯ハハ華人

○正虫字

考人母に正虫の字或尋しハ考ふの内ハ正虫  
考正虫と云ハ正虫の字ハ正虫の字ハ正虫の字ハ

諸多品字等々を考ふも正虫の字ハ正虫の字ハ正虫の字ハ  
卵為正虫所謂鶏蛋鴨音者是也云ハ字彙補の正虫を考  
て云鳥卵也江上鴨正虫洲と云ハ地何と云ハ正虫の  
行厨集ハ正虫の字ハ表ハ正虫の字ハ正虫の字ハ  
正虫の字ハ正虫の字ハ正虫の字ハ正虫の字ハ  
从卵為是と云又御談正音ヨ曰炖卵御煖旦正又酥卵御

酥且<sup>正</sup>とけりてきりぬハ蚕ハた人の音とて弾とてはる也  
又音を借て且とし作て之彈ハ象形とてハ玉子の圓  
ありふりてりしとてんてりて畢竟近世の俗字之目上

○查の字

查ハ茶の山查子又槎と通して水中の浮木之りて句  
了貫月查查とて俗義ハ考りてある典義便  
覽とて查查查勤則勉考りて我々ハ四字通て俗  
以查查為考察義後改用察查行曰察行查查盤曰察  
盤と又按とて查查照查查考りてはる

○魯魚帝虜

抱朴子云書寫以魚為魯以帝為虜と後世魯魚  
帝虜と云われおつて己亥渡河と三豕渡河  
と誤りて言豕とて三豕とていふとて著きと  
〜文心雕龍とて晋之史記三豕渡河文夏之謬也又云  
尚書大傳有別風淮雨帝王世記云列風淫雨別列淮  
淫字似潛移と云又増統韻府紙の韻とて簡牘磨滅  
以陶為隍以魯為魚と後陶隍の誤とていふとて  
朱語類陳煒ハ跋ハ魚隍之病謾不可讀とていふ魯

魚陶陰を令くろく又鳥馬馬又媪媪阿周田阿  
呈られの禮祀書経を引くもまう云くしそ白  
いつもし信寫のこく日

○上大人丘乙己

上大人丘乙己化三千七十士尔小生八九子佳作仁可  
知禮ふの三字つハ句末ふくあるこの字を東小児の  
小児をさるは天下一回トナれをそのかを祝枝  
山の根淡又水东日記を引くくししり孔子  
その又よ上るの書あり大人小丘一牙の化

信... 仁... 禮...

筆画のあき字をよせ令く小兒小兒也大人  
慧答呂郎中書に云平生所讀底書一字也使不  
著蓋従上大人丘乙己時便錯了也只欲取富貴耳云  
云幼年の時よの上大人とあるはさうしり也まうし  
りつしん目かまうしり、伊呂波成虫習ふ時と  
りあめ 上日  
いろは

台記久安六年三月十二日記云今日今麻呂卷所奉  
依教書心呂波

今按台記ハ字法た府郡長乙其日記より久安ハ年  
 場院の年号今麻呂ハ龍乙の島より音字の付  
 いろはを考ふるにあらざるに便りなる  
 てあり云々いろはの字法を考ふ

以同音漢呂同上波同上仁略保音一漢ニテ止訓知知音

利同上奴音留同上遠略和音加与同上太音礼

曾同上川和祢音奈音良同上武音亨音為

乃音於音久同上也同上末音計音不音

已音江和天音安同上七同上茂同上由音女和

此四七字ハ漢音ニテ

とくろはちやいれよ并日印記多

記ハ哉らぬるに音成用されし

昔の略迹の略津音々音利音多音成音人音

ひるくるん一音の字音又梵字の音

或ハ反の字ハ一音迄の字ハ一音哉りし

従くいろはの付くハ利の音成りたる

ハいろハ反の邊りハ一音知音

ハいろハ反の邊りハ一音知音

ハいろハ反の邊りハ一音知音

いふまゝに... 漢字の... 神代... 又日を... 神武...  
漢字の... 神代... 又日を... 神武...  
漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...

漢字の... 神代... 又日を... 神武...



流海流ありはをわやてん後には流のなまふめ  
あしとてん

望英仲師院あり梅もふ日や厄するにふあを  
かゝれたるをてん常に常の目と記さるるをてん

音を用ひて佛經に陀羅尼をくるとがめくふと  
れとてん

ち師のまゝに但舎人記さるるに  
我とてん融昌集のあけしとてん

て三十一のあをてん  
凡等とてん

あはのあ人とてん  
あやとてん

とてん  
とてん

者流のしとてん  
平七字のしとてん

音律音和州とてん  
のて古風とてん

以て其実を何れも其の文ふさぐ一たつ物なり  
とそ其日記目録に皆悉く其の流の一向の位甲  
一かゝ一空海の悉曇の音学を以て道一又能く  
以て才智英傑といひいふは亦も又佛法の如  
びざるあれも其作を以てしんを以てぬ説き多し  
此修名はそれより其著書に其作といふは是又  
ふ其紀およそ其院を以て空法指述不詳哉天皇  
の時時々々々の子文字十二かきとて山中書に  
し中せられは其の社に於ての如く其志は子に志  
其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは

くこに出きたり其の如くいふは其の如くいふは  
小官位殿門孔楽は其の如くいふは其の如くいふは  
裏に下れ割成を以て朝廷の学を嚴をもりしは其  
禪の意を以て其の如くいふは其の如くいふは  
是を亦その如くいふは其の如くいふは其の如くいふは  
を空海師よりいふは其の如くいふは其の如くいふは  
それよりさら其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは  
其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは  
其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは  
其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは其の如くいふは

たる心居はの字根の思ふより古風なるなり  
年山 絶

○像賛左右行の表

画像の賛左向の像ハ賛を左行おきて印を右に  
押右向の像ハ賛を常の如く右行おきて印を  
左に押近代の筆お多くめはまて作法といへ  
志のれ木を枝を志といふも兼子文集の同方伯漢  
の書より志の先生ハ賛の書中より右の辨あり  
考へるるなり 志のれはげあふひそのりこより  
てふはるるなり 兼燭 譚

契沖の書に大伴と道臣命

の末より昔の武敏の家より 淳和帝位より  
せあしより所名大伴ありなり 大の字哉さる  
てたて伴とよ大友ハ近江滋賀郡のゆ名あり  
大和物語よりまをたすかろかの際の名人といふ  
たり 志の抄に滋賀郡の志をまるといふも  
絶あり古今集志名序にまのりら大友まると  
かろし和名の作者より大伴まるといふは傳家の  
人而源氏とふぬ誤なり 年山 絶

いろいろは

つらけは後命傍於のちうめをすして述作あり成  
言世去所繼て後幕何とてさしめくまるともやと  
久勺のつちさうさうさうさうさうさうさうさう  
考多 悉星雲小通をせむ作行ふていふは多うさう  
定新 雑録

○八款

白石先生云世下之伝如く天心十八年八月朔  
冥赤の又出月ありの心若例とてし難くを聖まう之  
同上

○嘉慶

白石先生云是忘の家の告例之之利元年九月  
少て世の心かまらぬ

○月頭

澹伯先生云武家月頭の予二意仁長陣の時武士  
若年ハキとて 歌をそとてさめさしとてまう  
風俗とありとるさうさうそれをもていふは  
○さきくさる

世亦一種の佗人ありて意好をさういけるそれは波々名  
利をいひて采麻を樂むと向心とてさうさう  
それと多しといふはさうさうさうさうさうさう  
不整書をかきさうさうさうさうさうさうさう

抑も仍て伊実のまゝに赴きしを以て女名を記す  
せしむる國を摩訶載てその時の説きしを以てしる  
る知るべし。世に流るる女名を以てして流るる好  
まじきものもいふもいとまじきもの様なる人  
に非ずされ  
ハ往來子も佛は小乘願し福を以てお難哉と  
ふれハ女名小垂流し。淫奪を以て何の又識り  
る也 勢巻 雑話

○天平感寤

思案抄の曰く天平感寤元年七月二日 孝種を以て  
の七月二日又天平感寤元年七月二日 孝種を以て  
記ふて天平感寤元年七月二日 孝種を以て  
孝種を以ての混陽 漫録小出の

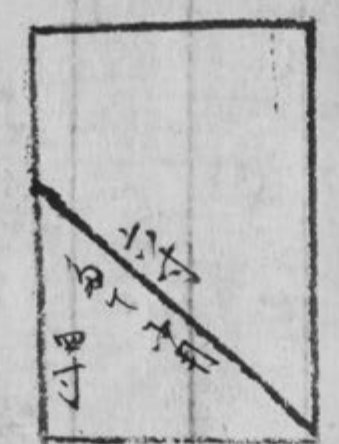
○二十四孝

二十四孝作者不知其姓名 統文教通考の元郭岳教  
撰二十四孝詩以訓孝子 郭岳教撰二十四  
孝とありあるや 詩もいふや 詳あるは郭岳  
子の金相二十四孝詩選成りしハ少傳に記ありて今  
の二十四孝と次序同くは 江革仲由 張孝  
回真何の 林道善之 詳古備矣 自古今言孝者多  
世二十四人大業也 孝子名冬 閻振 江革 陸績 郭巨 董

永一蘭韓伯俞劉殷田直孟宗王祥陳娥蔡姑王武子魯  
 義姑姜詩劄子鮑山黃香趙孝宗元世覺と二十四孝  
 ハ名家の撰中流定所 雑流一有きる

○書物大さ紙定る法

和云ハ大法き曲尺のうしろりの法之果のめ  
 めは横四寸すれハ堅ハうしろり  
 四寸よりさるべし  
 珍好あり



横の寸を...  
 の寸を...  
 の寸と...  
 の寸と...

○柳川も妻の婦人

筑後柳川之妻七松所傳分徳松村百世  
 年百九才け人長命身無病分法持持を  
 せりりし

○逸人画史抄録

中云在土無帛老人  
 著しり

祇園南海

名瑜字伯玉  
 俗稱与一紀  
 鐵冠道人  
 文学

著色の花む山あふ長く又墨竹を能く

柳海漫園 名里茶字公美 号王桂 郡山大夫 山水墨竹

彭城百川 伊勢の人 著色の花む山あ

滕若伸 名世釣号斗并希庵 京師の人 雞を写すふたふた

鉅鹿民部 名睦字子明 長崎の人 著色の花

望月玉蟾 林与五郎 京師の人 始七存我宗と 後洋画を慕ふ

池野石名 号大雅和秋平 伊字九と号あ

福系五岳 名狗字素文 京師の人 画を古雅ふ号あ

長島切 長谷川氏祐宗仁 山あを号と

熊津文 号枕溪和一翁 長崎の人 長崎の譯官

建初凌仙 字孟喬号寒葉斎 画を能く 墨竹を好 加茂翁と号す 所を工まを繕神宗

片山道寺の 名を号す

宋世紫石 名君赫号雪溪楠本氏係系就昂有輝 董九如世門子也 画法を伝へ 宋紫石と号す 遂に氏を冒す

董九如 号廣川 井元甚助 京師幕府の士 宋紫石と号す 京師尚古館 海春吾如号す

片山仁与女 京師墨畫 仁与長長と号す

大武探元 叙法橋 彦分の人 之を中探出と号す

友祥 京師の人 姓字ふ気 鼠の嫁みの画を画く 人に呼ぶと 号す 深家友祥 深と名付く 此人の号と号す

菱川師宣 号友竹 号寄号 彦分の人 江戸山宮居 時世及 春画を妙号す

山崎女新 江戸山崎下谷の人 師宣の号を業平 涅槃像の画を 号と号す

祖仙 表氏名守象 女海の人花の傳を猶の画に好む

三徳思考 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

澆川子 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

慧心 織田氏女 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

早嶽山人 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

渡邊濤水 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

何森崇隅 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

晁有輝 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

滕宗就 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

崑山 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

天氏 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

鑄木梅溪 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

楊伯氏 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

若芝 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

崑陵山人 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

鼓岳山人 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

春菴 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

劉安生 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む

岑亭鼎 名正親 名師 可憐村の人梅花の寫を好む 書を好む 書を好む 書を好む



寒之巖

此乃北山名也。熙字文奎，俗稱檀之妙。

雪下園

此種稱井川氏名，實字君錫，稱原多傷，号門漁，又四玉光。後淑字高，阿波人，略名，号五墨梅，能後步於佐久馬街之位。

大原春翁

名要，号墨翁，稱左金吾，平安人，山人，物花号。

石希聰

字獻父，稱百七郎，小原山人。

材田龍貞

平安人，名鱗，字景平，稱雄助，若名花号。

謝菴

丹波氏名，名言，字彰甫，尾州人，山人，号。

清狂

尾州人，号千寿，西邑氏，小原山人，又狂画。

信維明

系稱，号方寸，信名，周奎，墨梅。

餘風叔

大原氏名，俊明，字風叔，号老鏡，又八岳，大雅，小字。

赤梅齋

名西夷，大雅，小字，山人，号。

奉时道

浪花人，称布氏，蕙村，小字，又相，爱酒，墨字，蟾除。

竹石道人

讚岐人，名長微，山人，墨行。

雪之泉

新保人，姓，机，名就，字仲，号石磊，山人。

僧玉隣

浪海人，名正，遠，系，師，山，神，小，寓，墨，行。

破笠

山氏名，觀，字尚，行，号卯，觀，子，又夢，中，庵，東，野，人，苦，誦，佛，又，墨，名，善，又，漆，菴，代，作，其，古，雅，世，小，破，笠，細，工，稱，氏。

福玉雪岑

号白鳳，稱，稱，氏，山人，一，號，墨，行，山人，墨，行。

梅井山興

号雪，志，又雪，鉢，一作三，江，墨，野，人，右，山，山人，物，に，之，傍，墨，山，月，仙，宮，有，梅，屋，男，雪，鮮，守，家，法。

良雪

關氏，号自然，号在，武，山，雪舟，牧，溪，號，宗，墨，行。

白心

名字，名，洋，稱，墨，字，山人，是，を，以，嵐，を，威，其，歎，字，秋，津，海，白，心。

嵩之 依根氏名道賢字子嶽号果之筑一塔小学

嵩雪 名貴多稀倉次号中岳堂又小堂号守源法

嵩谷 言久氏名一雄号屠猪翁 嵩之也

藤芙蓉 大久保氏南亭 杜若天ら

河保寿 小河原氏字子昌号中基又務集 書成保君岳子学おる

月思雪鼎 市師の人号信実名稀丹下 时世粧春画の工之原意 挙言田家輔と世門と出此人の名画成主一也又火災を避くるとして世俗防火の考り需む考る

僧園空 佐州人今釈迦と号佛信成弘りんと僧夷ふ入るる

何日市 小川源人余尾形光琳小学へり光琳の即幸世人少信も通 稀平林立徳又白井宗賢と更む雀思逸氏金牛山人と号り

高田放補 江戸日也杉上の人 名口庵中仕へ物也れまに 学あ富士能意能急木右工之流淨福寺古桐和名に大書の情を学あ小竹隠多眉同毫翁の号何く男三徑亦能画之

篆刻家原芙蓉の妻氏 荏井女と号ふ又素翁と号

三好白芝 重根の名不任使を以て知る世人ぬの山方

と綽号八画をよみ山系山の工之伊字九を学あ

晩年影山の柳里茶の家子合名あり十好集りて

卒す三好氏女西中女十好也と款す

卒す三好氏女西中女十好也と款す

卒す三好氏女西中女十好也と款す

卒す三好氏女西中女十好也と款す

卒す三好氏女西中女十好也と款す

御製醫方類聚

卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

醫方類聚卷之四十一 雜考

玉深ハ池大雅の妻あり 百粒於肉也画哉歌山の柳  
里妻ありし言ふ山妻の少ありあり玉宮ハ柳先生の玉  
奎の玉宮くしや

傍月儂ハ尾翁の人之伊勢山田寂思ちの仁持之始  
也於縁山の言察し何し画と梅井山五ふ言ふ  
傍をよ名宝鼎あり祇園寺の仁持し画と梅井山  
五つし言ふ花多くあおたくみし又哉ハ河塚を言ふ  
人東海の河塚として珍きん

秀川許六ハ江あき彦根の士と云老井と号以 謝浩不  
十ハ言ふ之 昔在る画ハ我師より謝を我れん

大川捨海ハ下総ハ口市場の人之画少きん云ふ度  
以画ハ山本忠長泣の門人あり書ハ推善辟仙との号あり  
英一城姑多可ス歌遊多師の人之父位尾江ア山宮く姑也  
坊也永きし言ふ山ありて流せり伊勢山田久保一志云  
法吉文のあふ三十二云あ仙の像を姑十ハ板ハ多可ス歌遊  
の名有り流中判太神やあふし物と云ふん抄十ハ板を  
教存の画英一城の款字あり

謝英村ハ丹後守海の人なり 平原も住む流名一時あり  
画を自らも代知れ日光評を有前氏ハ厚手感書記程画巻

梅亭ハ大津の久々山人と号シ姓ハ紀名敏祖画多シ

芭蕉翁梅青の画松風の蕭蕭る六七歳より定住中川氏

ハ古武神主の肖像を風虎印アリ

有郭先生と云画稀アリ周堂の款字アリ毎年六

月廿五日川幸海より少林院より二三軸展覧

伏久河山殿ハ仙居屋の奥に杉島系得の馬成作

物似縁アリ神子似縁を好シ臥存の字歌アリ精

茶屋店経何リ

古綱和方ハ高原浄徳との位持アリ大園を修る事

画行ハ大島の如シ他人の以て企

石圃文振ハ伊勢久松の人アリ画ハ伊字九ハ刻意

天寿本孔茶ホシるもの一室君少系山水の画

伊字九に神擡アリ昔子字湖の幅画アリ風流

三谷平車亭と号シ尾崎の賣人ニ画を以テ池大

雅柳玉奎ホモ周旋ト性放逸アリ之立花寺町のニ

大根外ニ妻妾トシ海東ニ遊居トシハ十餘小

して後長後及ニ婦人志山のちふ入テ尾とあり

知雀知仙と号シ

津田少海名應圭字奎文尾藩の士と稱職経沈

氏の画と云ふ

宮本武翁肥前守原氏之画之劍法不名  
画凡そ谷川家不わつ二天と子印を用を  
東谷山人下院桃子の之に人集りまゝして  
侍り伴ひても家少あり画成然畫事少  
梅里山人江戸市の人幸々名氏山あり  
言陽山人土家のまにり種ハ中山法老ら人物を能  
源應岸 事類の画亦そある者あり 卓  
流と稱すべし

畫成時其の甚くは化をあらわす

其成りて画た又細密なる者あり餘人の企及べし

魏人画 定新雜録

○申楽 田楽

允格字も秦川勝りやひひて二千三百の飯面我地り  
りら神楽としふ文字の字を畧して申樂と稱  
田楽又申樂よりわけて時の俳優を申としり字  
の上下哉畧して田楽といふ者あり古也世  
たりてはさひく今の格楽信曲の合ををる文親  
世者何ゆるといふ後者乃其本なりと人と對

して後者し移りしやしもの智人乃物徑ふハ

武胆  
婦  
強

○長壽の君

百七十四 志賀陸海 百七十五 志賀陸海 百七十六 志賀陸海 百七十七 志賀陸海 百七十八 志賀陸海 百七十九 志賀陸海 百八十 志賀陸海 百八十一 志賀陸海 百八十二 志賀陸海 百八十三 志賀陸海 百八十四 志賀陸海 百八十五 志賀陸海 百八十六 志賀陸海 百八十七 志賀陸海 百八十八 志賀陸海 百八十九 志賀陸海 百九十 志賀陸海 百九十一 志賀陸海 百九十二 志賀陸海 百九十三 志賀陸海 百九十四 志賀陸海 百九十五 志賀陸海 百九十六 志賀陸海 百九十七 志賀陸海 百九十八 志賀陸海 百九十九 志賀陸海 百 志賀陸海

百一 浪田升と全百七十七 井坊丸ら 九十四 〇他備中守

百一 浪田升と全百七十七 井坊丸ら 九十四 〇他備中守

○海老野方の考

海老野高ハその義の外に事あるありともいふもあらず

好古和方しつる也れとさしお振ら茶人の出でしる

くの耳あふいと記杜筋のひちちるぞ初まきりしる

老彦の感のひ初言の信心同の流る津とと考

梅花仙史の空  
隠語後編

○神を月

中邦の供十月哉神を月とつち和去と説人種

の言説をさし皆事終所舎の説しして信するの是

以余考ふるふ中邦俗倫亦用る律呂の記あるを越

律を苦境律とあて十月の律といふも十月の律を

上之律といふる是も依て十月をいふも月といふは

○戲語堂法帖

戲語堂法帖之序人之去して事未成也や若  
くともよりの秘しや唐厚の換替言百傳くもよき  
うきどき予う方外の友詔送比兵ハ言也古乃  
意そ大和上の乞もく何る日さし行て何る事  
とる席に戲語堂法帖の終し七ぬ予唐人の去の  
よめくこれし戯話也い詔送師のかさるる戯  
語堂の知人の去ハ百法論の内のはりしとある  
とやれりしとさるく地法師之とさくさるるぬ  
東嶺子  
田仲宣著

落穂集まらぬ細金三升享保十三年大道寺か足軒

友山宗八十九揖す友山おとと小田系小條家と居ら  
父大及寺駿河ちと友山八平年し時大坂落城す小田系  
没後より浪人しる友山子孫九郎哉あへり事あるに七  
男七ちり別家にもある今哉ある首言死役を新し  
あ仍り七ちりとも友山の曾孫也代もり事あるに水堀  
出羽を慶安辛酉土方絶命し女母ハ即友山子孫也と  
云出目の孫也 左條言の祝くお方と母よりするに  
とる大及寺孫九郎ハ事終本今世三田と郎あり  
神あり事あるに七ちり孫九郎ハ幕府を事ある



言信す誤りや又之傳旅本の大及すまは同あされ  
とも自ノ別ありと云

○ 夢游漫筆

夢游山人著不知何許人

貝多葉

世子所謂此貝多葉をたすまふ物は何れぞ椰子  
此葉ありその辨般泉先生の蘭畹播着に詳  
あり

硝子

硝子をコラテにありて曰イトロ口止といふ此方までゴイド

石上子文字を書きしるる法

一つの石を取てよくおまじを何れとも端を溶し  
おまじと字と書しおまじを強き解の中子投さるる  
六時より七時を取出しその上の端をこすりけ落せ  
字石上子存し何れで消む

按さるる草お子小いなく亀尿可以和墨字入石を  
貝原大和本草附録子氏説とのせん日本よむわかし  
佛經を石よかく其文字久しく扱さるる此法なり  
といふ今もその石何れも本朝食盤子亀尿と取る  
法漆盆上子墨を鏡を以ておれを照せむ出川一説

子養耳子油といふ墨書とせり文字を考る石中  
に入て長く脱せり或云芸香を油に入て蛤粉の末  
をよめ石中書ハ脱せり云

禿頭生髮法

鰻魚ノ脂ヲ朝夕二度ヲ頭ノ禿ルタル処ニ塗ヘシ時久クメ  
ヨク新々ニ髮ヲ生スルナリ 大西奇方秘函

○換杏新話

田島慶匠實小川權斎指笹廷先生若菴老人序アリ

炒豆治灸痛

桂山先生ノ白牛込月桂寺門前ノ中島元吉ト云者ノ地

カタク水ヲ澆ケテ消ハス或人教テイリ豆ヲ嚙テツケサスルニ  
立處ニ火消シ痛モ止ム灸スル時豆熬ヲ製スル一ハ灸穴ヨリ  
血出ル一アルニ敷ハ血ノトマル故ニ古ヨリカクスル事ナリ然ルニ肉ニ  
火ノツキタルマテ治スルハ奇特ノ一ナリト屋代輪池翁ノ語  
ラレシト實ニ享和三年癸亥五月八日ナリト云

灸瘡出血

李樓カ怪證奇方ニ曰灸火至五壯血出一縷急如水手冷欲  
絶以酒炒黄芩一二莖酒下則止ト予ハ灸瘡ヨリ血出テ止  
サル症ニ三黄瀉心湯ヲ服サシメ血トメノ一方ヲ敷テ治シタリ  
此方少シノ金瘡ニ奇効アルノ一非ス吐血下血衄血諸ノ血症

二白湯ニテ服サシムルニ奏効最多シ其方左ノ如シ  
血ドメノ方

小麦藁

蓼蓂

エビヅル又ハ  
カマエビト云

右二味等分焼灰極末ニシテ用ルナリ又夏子益カ奇疾方  
ニ曰因着灸訖火加便便退落瘡内鲜肉片子飛出如蝶  
状騰空去手足随壞痛不可忍是名肉血俱熱治用大黃朴  
消各半兩為末水調下微利即愈下アリ

解烟草毒

解烟毒方

蘇子

甘草

薑仁

枇杷葉

右九味煎成去渣入砂糖一兩和服

勞虫咳嗽

治勞咳下勞虫方

檳榔

蜀椒

川練子

黑豆

橘皮

海人草

芫花

右七味等分ニシテ水煎服温ス

○草綿實

日知子綿實種を栽す。其の根長天白皇延暦十八年子天皇  
山崑崙乃人弘く漂浪く。其の玉子多く中人綿實を指

ありて裁初より一日中血を吐きしるやうにせむと類聚玉史  
百九十九卷に云海中比乱世にす由又文禄年中唐  
より傳へ来るに云 香月牛山小兒必用記

○今川家の赤茶

今川家の赤茶とて世子多病に用てある一茶  
より傳へ此茶は元來足利將軍光源院の御方  
比一対乞食の病の三條河原とては病了と身  
こやましく治す一茶病ありといひ一とす乞食を  
用ひ一やうて食ぬる村光源院一宮傳世といひ

或人云赤茶方一人を多病に治す一茶病ありといひ一とす乞食を  
用ひ一やうて食ぬる村光源院一宮傳世といひ

○井上喜庵

寛永の比井上を病とて醫人に先んば馬刺を  
飲せし人の後裔也寛永中一病死す享年七十四  
歳と云ふもの醫ありといふ法負善法師と云  
うの法物考ぬる源と云傳あり先見の人と謂へ  
事ハ如き詳あり 同上卷六

○指佞草

屈佞草の多しは昔の強善の情物志よりくくむの  
聖人者竟の庭不生く其情の院をあらうに 君  
の仁政地の及はば此草を生さざるく凡の多の草を  
多生くして知識なり 只その草のく知識有りて人  
此の觸きかき葉を食ひて殺され人さのく又もとのと  
く死も生類も異るるに今く人君の仁政を草  
生さざるく実くくく草のくくくく大幸  
にあはるくや固く其圖をく写して何く移く世に傳くと

博物志云堯時有屈佞草生於庭佞人入朝則屈  
而指之一名指佞草嘗疑草隨陰陽而屈伸或有  
焉合歡決明睡蓮之類是也無情草木奚能因人而  
屈佞耶蓋齊東野語也耳今歲獲阿蘭草種蒔  
之蠻名哥魯以地以而卜而迷以尼以禿其葉似地  
槐菜而其莖則朱觸乎則合人去則展宛如有神  
識者世儒案博物志所謂屈佞草是也或曰屈佞  
草指佞人此草則不然恐不允當予曰不然予閱草  
木數萬品未嘗有若此神異者蓋君德至地則生名  
曰屈佞草不亦宜乎且夫堯者聖人也聖人何假

草木之指佞乎設令能指佞亦何得有佞人而入  
朝廷乎唐山之人誇言過於實事讀書者當自  
知之贊曰

草生堯庭朱莖槐葉屈伏隨人德比冀茨

巴羊山本孺贊并序

是則惡之曰其為指佞之名含羞而

上之者其為指佞之名又巴羊山の

名其為指佞之名又巴羊山の

船長日記

石路の古く文化十の月 尾あつた

船智多丸船以日あつた村字古

と松あつた物あつたをさつた

とむり編まふ見えは氷海を

ノ経歴しゝるあきふあき







